

「令和8年熊本地震」での県内戦争遺跡・遺産の被災

※20260805版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生

1 はじめに

2026（令和28）年は、震度7を二度経験した「平成28年熊本地震」から10年の節目の年である。くまもと戦争遺跡・文化遺産では、2026夏の平和展として「熊本地震から10年 くまもとの戦争遺産被災レスキュー」展を7月22日より開催スタートさせた。主な展示資料は、公費解体された熊本市南區城南町「陸軍隈庄飛行場油倉庫」保管資料と県内各地から建物被災による戦時資料80点である。

その様ななか、令和8年7月28日午後4時半頃震度7の地震が当地を襲った。ここでは、前回地震での被災・救済・復旧・復興を再度まとめ、発災から一週間での熊本県内の戦争遺跡被災状況を速報報告する。



□「くまもとの戦争遺産被災レスキュー」展示

2 熊本県内戦争遺跡の指定等と現状

熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件である。そのなかで近現代戦争遺跡の指定登録は以下の通りである。

(1) 西南戦争期の指定等

西南戦争遺跡群（国指定、熊本市・玉東町）、明德官軍墓地（熊本市）、七本官軍墓地（熊本市）、花崗山陸軍埋葬地（熊本市）、旧輜重兵六聯隊衛兵所（熊本市）、有栖川の宮御督戦の地（玉東町）、篠原国幹戦傷の地（玉東町）、城の原官軍墓地（南関町）、肥猪町官軍墓地（南関町）、陣内官軍墓地（水俣市）、下岩官軍墓地（和水町）、高瀬官軍墓地（玉名市）、田浦官軍墓地（芦北町）、峰崎官軍墓地（芦北町）の計14件である。

(2) 太平洋戦争期の指定等

「花房飛行場給水塔」（陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定有形文化財）、「永山の掩体壕」（陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物）の2件である。また、合志市の「黒石原飛行場奉安殿」は、保存修復事業を進めており、完了後に合志市指定文化財への動きがあり。

(3) 熊本県内の戦争遺跡・遺産の総数と七大特徴

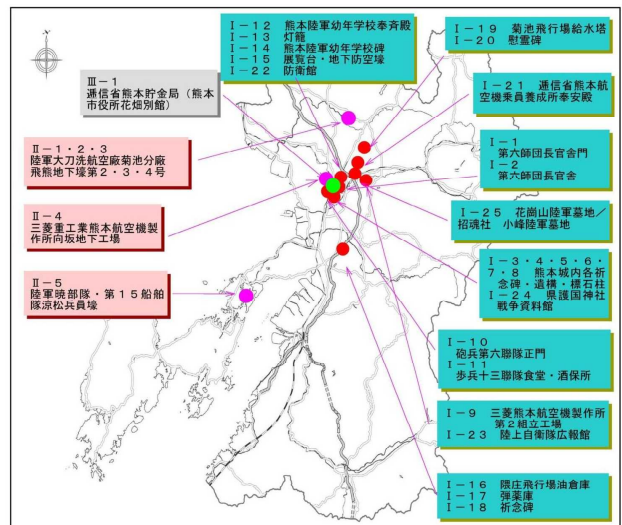
熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含めた「723件」となり、次の「7項目の熊本県戦争遺跡特徴」があげられる。

- ①軍都熊本市の軍事施設 ～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～
- ②九州で三番目に多い陸海軍飛行場 ～本土決戦に向け、地下にもぐった飛行場施設～
- ③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所 ～軍直営で石炭を原料とした黄色火薬の生産～
- ④三菱重工業熊本航空機製作所と学校・地下工場 ～陸軍四式重爆撃機「飛龍」の生産～
- ⑤本土決戦のための天草地区の砲台、震洋等の特攻艇基地と人吉地区の地下工場・地下壕群
- ⑥県内各地に残る空襲・戦災の「被害の歴史」
- ⑦朝鮮人や中国人、連合国軍俘虏労働の「加害の歴史」

但し、県域における太平洋戦争期の戦争遺跡・遺産の分布では、県北・県央が中心であり、県南地域に関しては、宇城市や水俣市等の各拠点で集中し、全域では「やや希薄な状態」である。

3 「平成28年熊本地震」での被災から復旧・復興へ

平成28年4月14日・16日熊本県地方を襲った二度にわたる震度7の激震、1,850回を数える余震で、特別史跡「熊本城」、城下町を形成した「新町・古町地区」の街並み、国重文「阿蘇神社楼閣」、熊本の近代を形創った洋学校「ジェーンズ邸」を始め、幾多の文化財が被災した。未指定文化財が多くを占める太平洋戦争期の戦争遺跡の被災状況については、第20回戦争遺跡保存全国シンポジウム長野松代大会で地域報告「熊本地震での戦争遺跡被災状況と復興に向けて」の通りである。その時点で、第六師団長官舎門等の「建造物・記念碑・資料館：25箇所」、陸軍大刀洗航空廠菊池分廠飛熊地下壕第2号壕等の「特殊地下壕：5箇所」、通信省熊本地方貯金支局の「その他：1か所」の「計31箇所」であった。



□「平成28年熊本地震」で被災した県内戦争遺跡・遺産の被災状況 2016年8月段階

詳細は、高谷和生「平成28年熊本地震での戦争遺跡被災状況と震災遺産としての保存」『第3回空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会報告集』2017、「平成28年熊本地震での県内戦争遺跡の被災から復興へ」『同第6回…』2019 空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会実行委員会を参照いただきたい。

(1) 未指定の歴史的建造物「限庄飛行場油倉庫」の記録保存・解体

特に限庄飛行場「油倉庫」は全壊となり、その重要性から「熊本地震で被災した“陸軍限庄飛行場の油倉庫・弾薬庫”を熊本地震の震災遺産として保存」を、平成26年8月21日松代大会で特別決議していただいた。そして戦争遺跡保存全国ネットワーク及び戦争遺跡保存全国ネットワーク四国、文化財保存全国協議会等の支援を受け、熊本地震の記憶とその伝承に関わる「被災レスキュー活動」として「3Dデジタル測量」等での記録保存を行った。

また、先述の長野県松代大会決議文を基に、9月27日熊本市長に「陸軍限庄飛行場油倉庫・弾薬庫の近現代遺跡・震災遺産としての保存」を文書郵送にて要望、県には10月20日同趣旨で面談要望、11月10日には改めて熊本市長手渡し説明による「震災遺産としての保存」を再度要望した。しかし、公費による解体期限の期日もあり、一部部材の熊本本市での保管、隣接する弾薬庫横への移設等は実現したものの修復費の所有者1/3負担の壁もあり、平成29年9月公費解体となった。また、陸軍傷痍軍人療養所再春荘の給水塔、通信省熊本地方貯金局（熊本市役所花畑町別館）も解体された。



□平成28年熊本地震で被災した陸軍限庄飛行場油倉庫の西側壁の崩落状態

(2) 市指定文化財「花房飛行場給水塔」の修復

旧花房開拓団水道組合が所有する「花房飛行場給水塔」は、太平洋戦争期の戦争遺跡としては熊本県内初となる平成22年9月菊池市指定文化財となった。熊本地震によるモルタル剥離や経年劣化等もあり、平成30年9月～12月で「熊本地震に伴う文化財災害復旧事業（国6分の1・市町村3分の2・所有者“6分の1”の補助率）」を利用し、躯体の耐震調査や補強は未実施であるが、露出鉄筋の錆止め、表面モルタル除去、再モルタル塗布、再塗彩に限っての修復が行われた。

(3) 未指定「歩兵十三聯隊食堂・酒保所」の修復

熊本学園大学構内に残された「歩兵十三聯隊食堂」は大正末～昭和初期にかけて建築された、熊本市大江地区に残された唯一の軍施設である。地震による被害は天井亀裂・部室天井モルタル落下等であったが、大学施設として、亀裂部の補修等に合わせ、天井からの落下物受け網の設置、建物再塗装の補修が独自でなされた。また、倒壊した限庄飛行場「碧空に祈る記念碑」等や入口へ土砂が流入した「陸軍大刀洗航空廠菊池分廠飛熊地下壕第2号」等でも、個人・所有者が「自助努力」として現状復旧・修復を行った。

(4) 個人の戦時資料「熊本地震被災レスキュー活動」の調査と収集

地震被災による建物の解体に伴い、個人が所蔵されている戦時資料の収集を6箇所（熊本・阿蘇・宇城・八代・西原・八代）約80点を収集した。主な救済資料として、出征幟・額装の教育勅語・慰問袋、「至誠」銘額、寄書き日章旗、軍服・軍帽・歩兵第十三聯隊写真帖、軍隊手帳・陸軍認識票、訓練用手榴弾等である。

ただ、被災地域全域でのこの活動への啓発は不十分で、個人及び新聞報道後のレスキュー依頼に留まった。戦時資料の価値性を理解していただくため本会では、熊本市城南図書館・熊本市立図書館等で「夏の平和展」を開催しており、会期中に資料説明会を開催し、一般を対象とした日常での調査等のシステム構築を進めている。



□熊本県上益城郡美里町の民家からレスキューされた戦時資料の数々

(5) 「平成28年熊本地震」からの復旧・復興へ

今回の熊本地震では、発生当初は民間の救済事業「熊本被災史料レスキューネットワーク」「戦争遺跡・戦時資料のレスキュー事業」「被災町屋レスキュー相談活動」が先行し、その後国・県等の事業が後追した。国・県による歴史的建造物対象の「文化財レスキュー事業」「ヘリテージマネージャーによる文化財ドクター事業」や絵画彫刻・工芸品、古文書、有形民俗文化財を対象とする「被災文化財レスキュー活動」も稼働し、未指定文化財の救済を目的とした「熊本地震被災文化財等復旧復興基金」も10月に設置され、その総額は38.4億円が積み上げられた。

今回70数年前の戦禍をくぐり抜けた戦争遺跡である限庄飛行場油倉庫等を、熊本地震の「震災遺産」として認定し併せて保存することは、これから全国どこでも起こりうる次の震災へ備え、記憶を継承する「戦争遺跡・震災遺産の保存」の新たな活動と本会等では捉えた。

だが、未指定文化財が多くを占める被災戦争遺跡の復旧・復興の為には、日本建築学会作成の「歴史的建築総目録データベース」へ未登録である事、文化財ドクター事業での専門家であるヘリテージマネージャーの派遣が出来なかった事、さらには戦争遺跡に対しては歴史的建造物と

しての価値性認識が十分でない事、修復対象としての市町村推薦も得られなかった事等、「公助」対象とする認識や「共助」とするための活動が未成熟で「創造的復興」には至らなかった。

4 「令和8年熊本地震」での被災速報

(1) 地震の概要と主な被災状況

発災から一週間目となる8月4日での主な被災状況は、以下の通りである。最大震度7。死者38人、負傷者119人、住宅被害1万2千戸を越え、避難者は8,262人である。断水は八代市・宇城市を中心に4万5千戸に及ぶ。また、前回被災のあった熊本市南区城南町の舞原台地の被災も甚大である。但し、指定文化財・建造物等の被害状況は、全容把握には至っていない。



□国指定史跡「八代城」石垣の崩落状況

(2) 戦争遺跡・遺産の被災状況

①米軍機銃掃射・爆弾痕跡が残る宇城市松橋町「永代橋梁」

昭和20年7月27日8月7日、10日に旧松橋町・不知火町を主な攻撃目標として、米陸軍第5航空軍及び第7航空軍が行った、駅・鉄道橋・道路等の交通要所への攻撃・空襲である。下部構は、橋脚2基・橋台2基で構成され、上部構造は、桁連数3連の「三径間単純鉸桁橋」橋長40.74mである。夏草等が繁茂した水際となり近似が困難で、「遠景目視では異常は認められない」が、「詳細調査」が必要。



□宇城市松橋町「永代橋梁」の遠景

②西部軍第三事件で墜落機俘虜連行の舞台となった八代市鏡町「印にやく神社」

8月7日の松橋空襲時に被弾したB25機が氷川に墜落し、生存した5名の搭乗員が連行された比叡部隊の駐屯地である八代市鏡町周辺の被災状況である。搭乗員は8月15日に戦時捕獲搭乗員・戦犯として処刑された。

本神社の鳥居が崩落し、社殿が倒壊している。

①八代市郡築町のコンクリート製「嶋崎正雄慰霊軍人像」

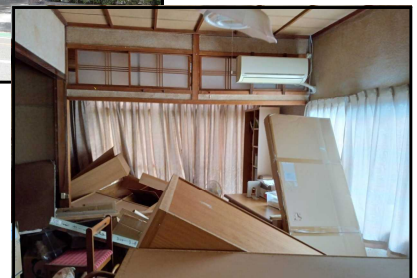
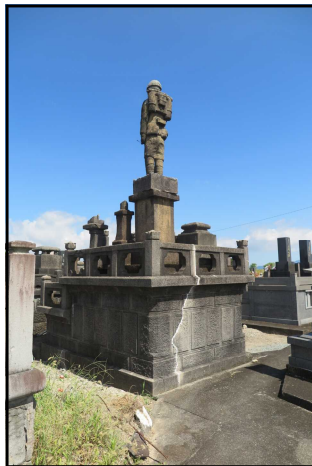
軍人像とは、明治以降の近代戦争で亡くなられた軍人を慰霊・顕彰する目的で製作・設置された像である。県内個人慰霊軍人像事例では「計24躯体」が確認されている。多くは石製だが、コンクリート製軍人像が八代市郡築町の嶋崎正雄像、同市井揚町の岩崎家像、同市千丁町に石川吉登像の三軀が所在する。

この八代市郡築町12番の6校区共同墓地に像名「巧八級 故陸軍歩兵上等兵 嶋崎正雄之墓」が所在する。昭和14年10月14日没年で、建立日は不明であるが、建立は嶋崎末彦である。材質はコンクリート製、内部鉄製番線が露出し、陸軍軍衣、鉄かぶと、三八式歩兵銃、前ごう、後ごう、背のう、飯盒、雑嚢、剣差を装備する。尊像は全高189cm、台座は全高130cm、正面墓誌には「巧八級 故陸軍歩兵上等兵嶋崎正雄之墓」銘が、銘文は「戦闘ニ於テ頭部貫通銃創ヲ受ケ壮烈ナル戦死ヲ遂ク 昭和十四年 十月十四日 戦死 建主嶋崎末彦」とある。

軍人像の尊像が乗る「台座ごと」約15cm移動・ズレが発生しており「不安定な状態」である。

(3) 戦争遺産、戦時資料のレスキュー活動

今後は、建物解体・生活再建に関わり、急激に戦時資料の廃棄が進んでいく。前回と同様に「戦時資料レスキュー活動」を、宇城市・氷川町・八代市等を対象として、前回反省点を踏まえ進めていきたい。



□上：八代市郡築十二番「嶋崎正雄コンクリート製軍人像」の被災状況

□右上：八代市鏡町の「印にやく神社」鳥居の崩落状態、奥には倒壊した社殿

□右下：「くまもと戦争と平和の資料館建設準備会」戦時資料保管先の宇城市の被災状況